

主題「横暴な主人に従う」

聖書箇所 マタイ17:24-27、1ペテロ2:13-25、ガラテヤ3:23-29

序論：

先週は確定申告締切の週でした。私もみなさんもいろいろと工夫して節税に励んだことと思います。この国の政府、また県や市、その他もろもろの行政機関は主によってその存在が許されて、たてられたものです。それは私たちが、肉体的にも精神的にも安心して生きるために存在しているのです。もちろん完全ではありません。首相がクリスチャンであったとしても必ず欠点はあるでしょうし、主のもとに戻るまではこの世の法律にしばられて生きなければなりません。

ただ、もし税金を払い、行政、警察、災害救助、インフラ整備などをしなければ、私たちはもっと不便で、恐れながら生きなければならなかったでしょう。そしてまさに人間が自然状態に放り出され、強いものが弱いものを支配し、また弱いものは強いもののすきをうかがい、暗殺、陰謀で対抗し、無秩序な状態が生まれます。そうすると、貧困、争い、病気、不信が社会にあふれ、人々は短命でいつ、どうなるかわからないという不安にかられながら生きることになってしまいます。

そこで今日のペテロを読んで見ましょう。

自由人

16節にあなたがたは自由人として行動しなさい、とあります。主は十字架で死なれました。それはあなたを、また私を完全に自由にするためでした。しかし、この自由は何でもやっていいという自由ではありません。罪からの自由です。主イエスを信じた時に私たちは完全にその束縛から解放されました。人間が、また悪魔が「お前のような罪人は決して赦されない」と折に触れてささやくことはあるでしょう。しかし、はっきりと宣言できるのです。「私の罪の身代わりに主イエスが十字架に架かって下さった。もはや私は罪の裁きを受けなくてもよい！」と何の良心の呵責も、遠慮もなく、堂々と宣言できるのです。つまり、私は罪を赦された、だから誰が何と言おうと「罪赦されていると言うことは」、いや「罪赦されていると言うことが！」むしろ正しいのです。

「いやあ、罪赦されているかどうか、天国に行ってみなければわかりません。」と言う人もあるでしょう。心情的にはわかります。しかし、「救われているかどうかわかりません。」という状態は本来ありえないのです。あなたは主の身代わりの死と復活を信じた。そのこと自体、聖霊によるのでなければ起こりえないことなのですから。

それと同時に私たちは罪の力からも自由になりました。ただし、もう決して罪を犯さないと言う意味ではありません。私たちの肉（自我）はいまだ罪の奴隷であり、いつも主に背を背け、その利己心を満足させようと活動しています。肉はどこまでいっても肉であり、悪どい肉も、ファッションナブルな肉も、キリスト教的肉も結局は肉にすぎないのでした。

しかし、主は私たちの死んでいた霊（主と交わる機能）をよみがえらせ、聖霊による支配をこの心に確立して下さいました。聖霊は自由です。何の打算もありません。律法を守れと命令するでもなく、変な功名心で我々を奮い立たせるでもなく、軽やかに私たちを導いて下さいます。そしてそのような人は幸せそうに見えるのです。これこそ真の自由人です。

この世の権力に従うこと

人の立てた制度に、主のゆえにしたがいなさい。しかし、自由人として行動しなさい。では私たちは具体的に何に従うのでしょうか。人のたてた制度とは何でしょうか。まずは家族です。子どもは親に従い、妻は夫に従います。現実には色々なケースがあるでしょうが、とにかくそういうものだと思ってください。また学校においては校則に従う、先生に従う。会社においては社則に従う、上司に従う。政府においては条例に従う、法律に従う。15節にはそれは神のみこころだ、とあります。もちろんそれぞれ

れ色々なケースがあって、時にはしたがわかない、と言う選択肢もあるでしょう。それは個々のグループをよりよくするためと言う場合や、人のいのちを左右すると言う場合にかぎられます。ただ気に入らないからと反抗的に行動すると言うのはまったく神のみこころとは関係ありません。

主は其の都度つど、私たちに判断力を与えてくださいます。「人に従うより、神に従うべきです」という場面も出てくるでしょう。しかし、わたしたちはそれぞれ与えられた環境の中で何かに従って生きていくのです。

良心、律法、キリスト、人間

ではどういう心構えでしたがっていくのでしょうか。まずは自分が完全な自由人であることを覚えましょう。人はどういうものに従っているかを考えてみましょう。良心にしたがうという言い方があります。それぞれの心にある基準、良心は本来素晴らしいモノです。ただこれは人によってまちまち、まただんだん鈍くなるという特性もあり、あまりあてにはなりませんでした。

次に律法に従う生き方です。旧約のイスラエルはこれを目指しました。その壮大な実験によれば、人は完璧な律法を与えられ、それを守る動機や、罰則、奇跡を見せられても決して守れないと言う現実でした。

ではキリストに従う、ことについてはどうでしょうか。キリストと3年半寝食を共にした仲間たちも結局裏切ってしまいました。

では人間に従うことについてはどうでしょうか。これは権力者に従うだけでなく、隣人を愛すると言う意味で、心から人間に仕えることが出来るか、と言うことです。そしてパウロがキリストの命令を集約した「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」と言う言葉を実践することです。もちろん、私たちに実践する力など1ミリもありません。ただ主がそれを実践するものとしてくださった、と言う宣言を今は信じるのみです。

横暴な主人という恵み

横暴な主人に従うこと、これほど嫌なことはありません。自分の決心によってはそんなことは不可能です。しかし、横暴な主人のもとにおかれてしまったら、そしてそこから逃げ出せないとしたら、どうでしょうか。主はそこで私たちをどのように用いるのでしょうか。

北朝鮮の話を聞きました。脱北して来た北朝鮮の方々にクリスチャンはほとんどいないそうです。たまにいたとしても、ほとんどがまた北朝鮮に戻っていくというのです。彼らは確かに圧迫を受け、過酷な環境にいます。しかし、そこに主が自分たちを置かれた意味を日々、問うているのです。そして、隠れて行う礼拝の中で、主にある喜び、兄弟姉妹の愛、聖霊の導きを深く深く実感しているというのです。

確かに主はおられるはずですよ。彼らの主への飢え渴きを主が知らないはずがありません。

横暴な主人、意地悪な隣人、厳しい上司、かれらの存在こそ主の愛を、発見する大チャンスと言えるのです。そこに主の御計画があると信じる、信仰が私達には与えられているのです。

二つの歩み

主の命令に従えないかもしれない、しかし、私たちは主の足跡に従う信仰が与えられました。敵を愛することなど無理です。しかし、主はそれを実践されました。悪い政府など無視したい。でも主は其の政府に従う道を歩みました。

この主への信仰が新約聖書に命を与え、私たちの心に語ります。新約聖書の光が旧約の律法を照らし、主の愛を教えました。

完全な自由人として、不自由なこの世界を軽やかに、生きて行きましょう。

「主の手に 引かれて いづくへなりとも 御旨のまにまに 日々したがいうかなん」